

## 資 料

## ルイ 14 世時代の古い邸宅

—— 「パリ歴史散策」(9) ——

ジ ョ ル ジ ュ ・ カ ン 著  
金 柿 宏 典\* 訳注

パリは驚きの都会である... 私たちは誰もモンパルナス大通りを知っており、白い石膏で塗られた高い建物に縁取られ、群衆で雑沓しているこの道を何度も横切っている。建物の間に煙草屋や電車の切符売場があり、ビヤホールやいろいろな形をした酒瓶をならべた明るいショー・ウインドの「ワイン商店」commerce de vinがこの通りを飾っている。酒類は「アブサント・ペルノ」<sup>1)</sup>「アメール・ピコン」<sup>2)</sup>、胴のふくれた瓶のキュラソー、葡萄の葉で飾られた細首の瓶に入ったアルマニャックなど<sup>3)</sup>。

この大通りのそこここで、この大通りが、当時のパリのこの一帯にあった多くの宗教団体が所有していた、樹木の繁った庭園や公園の土地に開設された事を想起させるような遺跡に出会う幸運は滅多に無い。

という訳で、25番地の標札の出ている大変に醜悪な家の前に立ちどまるよう教示してくれる必要がある。その正面は —— 「美術セラミック」Céramique d'artの製作所とウィーン風パンを並べているパン屋に挟まれている —— 手羽と脚を胴体に糸で縛りつけられた鶏が何ダースも並べられているロースト肉屋と、けばけばしい赤を塗りたくった鉄製の三つの巨大な「雨傘」を看板がわりに掲げている傘屋が入っていた！ しかしこの建物の左右に、古風な柵が二本の狭い通路に開いており、一軒の素敵な古い邸宅に通じていた。その住宅<sup>4)</sup>は大変に古く、時の流れにより古色蒼然とした壁を持ち、怪人面の彫刻と錬鉄製のバルコニーで飾られていた... ルイ 14 世の大御代のこのような

---

\* 福岡大学名誉教授

壮麗な遺跡が、時のもたらず損傷と人間の悪行にも不拘、どうして今も立っているのだろうか？（図版A, B）

この邸宅はしかしながら左右から密着している石膏の醜悪な建物のため、高額な身代金を払っていた。安普請の上屋のために屋根が砕かれ、正面玄関から数米はなれた昔は庭だった場所におそろしくモダンなスタイルの新築の大きな家が立っているのである！

このような出会いは夢想を誘う。前世紀には、多くの善良なパリ市民たちが、モンパルナスの土地に別荘を建て、そこでは、市民たちには親しい「郊外の別荘」vide-bouteilleや、大貴族や実業家たちの喜びである「別邸」Foliesが農地や修道院所有の葡萄畠の間に点在していた。17世紀に「パルナス山」Mont-Parnasseがどんな状態かを知るには、パリの古い地図帳を開くだけでよい。庭に囲まれた小さな家、大庭園の中央の大邸宅がみられる。長いヴォージラール街<sup>3)</sup>は、片側はリュクサンブールの広大な領地により、反対側は団体や教会、「フィーユ・デュ・サン・プレシュー」やカセット街<sup>6)</sup>の角にある「カルム・デショー」、バニョー街<sup>7)</sup>の角のサント・テークル、ノートル・ダム・デ・プレなどに縁取られていた... パリ市のはずれ、ヴォージラール街とヴィエイユ・テュイルリ街（現在のシェルシュ・ミディ街<sup>8)</sup>）の間の曲り角をつくっているこの邸宅は最も孤立し、最も神秘的であったにちがいないが、私たちは、この「テバイド」<sup>9)</sup>を選ばせた謎と孤立の必要性を、間もなく解明できるであろう...

テュルゴ<sup>10)</sup>の地図（1734）はカルティエ（界隈）全体を示す以上のものである。地図は私たちの好奇心をそそる邸宅の外形を正確に示している... よりよくとってよい... 地図は私たちが現在その邸宅を再発見したままの姿を提示している。一階から三階まであり、三角形の正面破風のある美しい正面玄関。邸宅の前に5点植えの樹木が両側に並んだフランス風の花壇がある。入口はヴォージラール街に開いていた。

現在モンパルナス大通りになっている所は、1734年ではこぼこの起状に富んだ丘で、その斜面に馬車道が通っていた。この丘の反対側は野原や空地や野菜畑、牧草地や木立や小さな沼が散在し、春の日曜などパリ市民が団体で楽しみにやってくるこの郊外の魅力を教示している。人々は草の上で食事をし、デザートの際に歌ったり、クレレット・ワイン<sup>11)</sup>を飲んだり、それから若者たちはコントラダンス<sup>12)</sup>を踊り、その間老人たちは「さいころ遊び」をしていた。これらの好ましき風習は、私たちの祖父母たちの風習で、19世紀の前半まで続いた。フロリアン<sup>13)</sup>はこれらの風習を優雅な詩句で歌い、デゾジェール<sup>14)</sup>とコルマンはシャンソンに作曲し、ポール・ド・コック<sup>15)</sup>の著作はこの種

の冒険物語に溢れている...（図版 C）

聖職者の財産を没収した後、大革命はそれらの一部を療養所などに改造し、残りを国有財産として売却したが、そのささやかな節約分はつましい家や、小さな葡萄畠や個人の庭に変貌していった... その後、城柵が後退し、パリ市の郊外の合併が生じる。メニルモンタン<sup>16</sup>、モンマルトル、ヴォージュラールなどがこれらの家々と庭園を吸収し、第二帝政時代には既に、建築用石材が大木にとって代った。街路、並木道、大通りが生垣や樹木や泉水の上を通っている。かくして、共和暦第 2 年（1804 年）の市街地図ではまだ何本かの街路の跡や広大な空地が残っていたが、1840 年には既に全く変っている。1850 年、グランド・ショーミエール<sup>17</sup>のダンス・ホールがモンパルナス大通りに多くの学生や女工たちを誘引した。〔原注：皆さんが御覧になっている大通りが、モンパルナス大通りです。照明が悪い低い入口の前に停車している辻馬車が私たちに「グランド・ショーミエール」を教示してくれます。「グランド・ショーミエールを知らない人がいますか？ フランスの何処であろうと、学生たちの天国であり、彼らが帰郷する時にパリから持ち帰る最も甘美な伝承であるグランド・ショーミエールを自慢するのを聞かない所がありませんか？ 学生たちの最初に飲むパンチ、彼らの初恋、最初の決闘が、この「ショーミエール」で起こるんです。彼らが政治家になるのもこのショーミエールですし、1830 年 7 月 26 日月曜日に大規模な反乱<sup>18</sup>の一部を組織したのも、このショーミエールなのです。オーギュスト・リュシェ：『1833 年の郊外のダンス・ホール』*Les bals champêtres en 1883, Nouveau Tableau de Paris au XIX<sup>e</sup> siècle*, p.382〕。人々は下手なヴァイオリンの演奏で踊り、おつまみのエシヨード菓子<sup>19</sup>を食べながら、「マルスの美味しいビール」bonne bière de Mars を一気飲みしたのである... ここが、現在では、パリで一番人通りの多い繁華街の一つになっているのである。

以上が、この静かな地区で再発見できたルイ 14 世時代の遺物である私たちの邸宅の存在を説明している。27 番地の標札のかかった柵を入ると、すぐさまその美しさ、怪人面、正面の切り妻の彫刻のモチーフの多様さに魅惑される。入ってみよう。広い石の階段に錬鉄製の素晴らしい手摺がついている。三階から既に最初の手摺につづいてより単純な手摺が連結し、ついで恐ろしい「鑄鉄」fonte de fer が現れた！ 私たちは現代に増築された建物に入ったのである。残念なことに代々の所有者たちは、17 世紀の上品な邸宅を「調べ大規模に増築」してしまったのである。そのため建築学的美しい線は大いに損なわれてしまった。建物の上部は今日では小部屋の住居や画家のアトリエになっ

ている。

友人の親切な執り成しで、小部屋の一つを開いてもらった。住居の昔の美しさを証明するものは何一つなかった。多分あった筈の部屋の内張りの木造部分は完全に姿を消していた。石膏製のギリシャ神話の女神ポリュムニア<sup>20)</sup>の像(図版D)が待ちくたびれている貧弱な芝生を見渡す、蔦の絡んだ鉄製のバルコニーに出会わなかったら、私たちの訪問は無駄足になっただろう！ しかし善きパリ市民にとり、歴史的なバルコニーに手を置くことは喜びでないだろうか？ ともある、これこそ何よりもまず大切なものである。御賢察の程を。

\*  
\* \*

モンパルナス大通りの邸宅は、ルイ14世が、後にマントノン夫人となるスカロン夫人<sup>21)</sup>に、彼女がモンテスパン侯夫人<sup>22)</sup>の三人の子供を育成した献身に対する報酬として与えたものにちがいない。三人の子供たちは、1673年に嫡出子と認められて皇子になった。(図版E)

以下がそれまでの事実である。1652年6月、「国王顧問官兼給仕長」conseiller et maître d'hôtel du Roiの詩人スカロンが、美しいフランソワーズ・ドービニエと結婚した。結婚契約書は、夫婦の持ち寄り財産を正確に記してあるだけでなく、綺麗な花嫁の戸籍まで示している。スカロンは婚約者が、年金四ルイ、二つの大きな反抗的な目、大変美しい胴、美しい二本の手と多くの才気を持っている事を認識した、と宣言している。公証人は実務的な人物だったので、彼が婚約者に対し如何なる財産を死後に与えるつもりか、と質問した。「不滅性」Immortalitéとスカロンは断言したのである。

詩人という連中はなんとも度し難い！

その後は誰も御存知の通りである。スカロンは病気のため奇形になったが、妻の献身のおかげで、それほど惨めな死を迎えなかった。彼女はサン・ジャック街<sup>25)</sup>のウルトラ会修道院<sup>26)</sup>に引退した。ダルブレ<sup>27)</sup>元帥夫人は彼女が自分の家に同居する事を望んだが、独立を欲していたスカロン夫人はこれをことわった。モンテスパン夫人がスカロン夫人を知ったのはダルブレ邸で、彼女はスカロン夫人に友情を抱いた。詩人の未亡人は皇太后が与えてくれた2,700リーヴルの年金でつつましく暮っていた。この年金はマリ・ド・メディシス<sup>28)</sup>と共に消失してしまう。こうして美しいフランソワーズ・ドービニエ

は生活費がなくなってしまった... 突然、地平線が明るくなる、モンテスパン夫人が廃止された年金を復活させよという勅許状を国王からとってくれたのである...（図版 F）

それはルイ大王と誇高いモンテスパンの国家的恋愛の時期だった。1669年にこの愛から娘が生れたが、この子は三歳までしか生きなかった。1670年3月30日、（メース公となる）男子が生れた。〔原注：子供たちを上手に養育し、上手に人の目から隠す事のできる人物の手に預ける事が問題だった。彼女はスカロン夫人を思い出し、この事を誰よりも上手にできる人はいないと思った。そこで彼女はスカロン夫人に提案したのだが、スカロン夫人は、モンテスパン夫人の子供たちを世話するつもりはない、と答えた。しかし、もし国王が自分に子供たちの面倒をみるようにと依頼するなら、国王の御意志には従うつもりだ、と言った。国王はこの件を彼女に依頼したので、スカロン夫人は彼女と共に子供たちの養育にあたったのである。〕

『ケリュス夫人の回想録』*Mémoires de M<sup>me</sup> Caylus*<sup>29)</sup>、38頁]この息子を養育するためモンテスパン夫人は、トゥールネル街<sup>30)</sup>の小さな家にひきこもってつつましく暮らしていた「若く美しい未亡人」スカロン夫人を考えついたのである。最初、スカロン夫人はことわったが、考え直して承諾する。「もしお子様たちが国王のお子でしたら、よろこんでお引き受けいたします... でも国王が私にそうお命じになって欲しいのです、それだけです。」この謎の子供を育てるだけでなく、最初は受け入れる事が問題だった。モンテスパン夫人は、すべての人の目から自分の弱点を隠す事を熱望していたから、自分の美しい容姿を隠す新しい衣服を想像するまでになったのである...

「最深奥の秘密を守るあらゆる用心を払った」人目を避けた家の中で、この赤ちゃんを養育するため赴いたのである。用心の手段は非常によくとられていたので、医師自身も「目隠し」*les yeux bandés* され、この未知の病人の所へ案内されなければならなかった。この律儀な人物は自分の患者の身分は何かと疑念をもつ事はほとんどなかったので、「そこに居あわせた」太陽王の手から「ワインを一杯」サービスしてもらったほどである！ 回り道をした辻馬車で連れてこられたスカロン夫人は、マスクで顔を覆ったモンテスパン夫人の邸に入り、子供を受け取り、ショールで包み、盗賊のように退去したのである...

翌年の3月31日、サン・ジェルマン城館で同じ事が行われたが、しかし今度は赤ちゃんを受け取ったのはローザン<sup>31)</sup>で、彼はマントで赤ちゃんを包み、この大切な荷物を持って皇后の館を横切ったのだが、赤ちゃんが泣き出すのではないかと、ひやひやしていた。

彼は赤ちゃんを辻馬車の隅に身を隠して待ちかまえていたスカロン夫人に大いそぎで手渡したのである。三年の間に、スカロン夫人は国王の三人の子供たちを受け入れねばならなかった。彼女は子供たちから目をはなさず、しっかりと監督し、世話をしなければならなかった。しかし子供たちと一緒に住まず、特に生活習慣を何も変えなかったのは、宮廷の疑念や嫉妬をひきおこすのを恐れていたからだった。彼女が強制されたこの種の生活を理解するには、彼女がサン・シール<sup>32)</sup>で語った対話の一つを聞かねばならない。〔原注：他の人たちと同じように好奇心を持ち、その存在に関心を持ったコルベール<sup>33)</sup>は、彼女が子供たちを育てたのは本当なのかどうかを知りたがった。モンテスパン夫人は毎晩皇后と遊んでいた。彼はスカロン夫人宅に行き、不意打をしようとして名乗りもせず家にいった。彼女は王子の一人を愛撫していた。あわてずに、彼女は巧妙に王子を隠し、下着の包みのように王子を運び出させ、冷静に大臣と会話をしたので、大臣はそのためだまされた人間かもしくはそう見えたのである。〕

『マントノン夫人の歴史に役立つための回想録』

*Mémoires pour servir d'histoire à M<sup>me</sup> de Maintenou*, ラ・ボーメル<sup>34)</sup>著, 第2巻, 第4章, 5頁]。

「可成り特殊なこの種の名誉は、私に無限の苦勞と配慮を要求しました。私はインテリアの職人や労働者の仕事をするために梯子にも登りました。彼らを部屋に入れなためです... 乳母たちは疲れるのが嫌で何もしなかったのですが、彼女たちの母乳はまずまずのものでした... しばしば私は下着や肉を抱え、変装して、乳母の家を一軒一軒歩いて行きました。そしてパリ市外の小さな家で病気になった子供と一緒に何度も夜を過したものです。朝になり、私は裏門から自宅に入り、着替えをしてから正面玄関から出て辻馬車に乗り、ダルブレ邸<sup>35)</sup>やリシュリユー邸<sup>36)</sup>に行ったのも、私のお仲間の社会の人たちに、私が守るべき秘密を持っている事を知られないためでした... この事を悟られないために、モンテスパン夫人の名が口にされた時、私は赤くなるのを防ぐため、大変な努力をしたものです。」

\*  
\* \*

ラ・ボーメルは、スカロン夫人を急に訪問した国王が体験した感動をもう一つ語っている。彼女は「熱を出したメース公爵を片手に抱き、別の手でナント嬢を持ち、ヴェク

サン伯爵がその間彼女の膝の上で眠っていた」のである。この事について、善良なエゴイストである国王は言った。「彼女は良く愛する事を知っているから、彼女から愛されるのは快樂であろうな」と。〔原注：非常に広い庭のある可成り美しい家に閉じこめられ、私に仕える人たちにしか会いませんが、私はとても元気です。私の最後のアヴァンチュールの中で、すっかり魅了され、恍惚としています。私は毎晩あなたの肥った従兄（ルーヴォワ氏<sup>37)</sup>）に会います。彼は自分の主人について何かしら話して帰って行きますが、私が長い間彼と会話したくないからです<sup>38)</sup>。その御主人は、私の意に反し、時々我が家に参りますが、不愉快にはならないのですが、絶望して帰って行きます。

『グリニャン夫人<sup>39)</sup>宛のスカロン夫人の手紙』 *Lettre de M<sup>me</sup> de Scarron à M<sup>me</sup> de Grignan*, ラ・ボームルの引用]

そして、この混乱した印象の影響を受け、国王はスカロン夫人に6,000 リーヴルの給与を与え、一軒の邸宅を授与し、その邸の召使一同を決定した。

1673 年から既に秘密は最早秘密でなくなっていた。メーヌ公爵、ヴェクサン伯爵、マント嬢を嫡出子と認める手紙が高等法院によって登記されたからである。そこでスカロン夫人は王子たちに尽した配慮を告白することができた。彼女は天下晴れて生活し、彼女の邸は公開され、1674 年 12 月 4 日、セヴィニエ夫人自身が、私たちが先日の朝に一巡した邸に彼女が訪問した事を、次のような言葉で語っている。

「私たちは昨日、クーランジュ夫人<sup>40)</sup>宅でスカロン夫人、テストユ司祭と共に夕食を共にしました... 私たちはフォーブール・サン・ジェルマンの片田舎にあるスカロン夫人の邸に真夜中に戻るのを楽しみました。（フェルー街<sup>41)</sup>の近くのヴォージラル街に住んでいる）ラファイエット夫人<sup>42)</sup>の家からずい分離れていますが、ヴォージラルに可成り近い田舎に、彼女の邸はありました。大きな美しい家で人は入れません。広い庭があり、美しく大きな部屋がありました... 彼女は四輪馬車と馬を持っており、彼女は質素ですが素敵な服を着ており、高貴な人たちと一緒に人生を送っている女性のようにした。彼女は愛想がよく、善良で気さくでした... 私たちはお話をし、彼女と共に大いに笑いました...」

事件が続発する。それが大いなる幸運だったのは、スカロン夫人がマントノン夫人となったからである。それは国王の後となった事である... 彼女は 1719 年に死去し、邸はラ・トゥール・ドーヴェルニュ家<sup>43)</sup>に移り、1778 年 9 月 21 日、ゴドフロワ・シャルル・アンリ・ド・ラ・トゥール・ドーヴェルニュ・ド・ブイヨン、テュレンヌ子爵によ

り、ジャンヌ・カンティエンヌ・レー嬢と実子であるエティエンヌ・ゴドフロワ・ド・フォランヴィルに遺贈された... フォランヴィルは亡命し、イギリス海軍のフリゲート艦の艦長になった。1806年、彼はジャージー島<sup>44)</sup>に住んでいた。〔原注：パリの公証人ルソー氏とその同僚の前でなされた、ゴドフロワ・シャルル・アンリ・ド・ラ・トゥール・ド・ヴェルニュ・ド・ブイヨンより、成人に達した娘ジャンヌ・カンティエンヌ・レー及びその実子エティエンヌ・ゴドフロワ・ジャン・マリ・ド・フォランヴィルになされたヴォージラール街の邸の正式な贈与。〕

レー夫人には用益権を、

フォランヴィル氏には虚用権（用益権無き所有権）と母の死後の用益権を贈与する。  
1778年9月21日。

セーヌ県記録保管所]

邸は亡命者の財産として、国家により、1806年10月11日に売却される。競売命令書が住居の詳細を示し、庭の状態を記述している。「壁に囲まれ、菩提樹が植えられ、大きな二面の芝生がある。正面入口はヴォージラール街である。正面に鉄柵のついた大きな生垣が、脇戸と同じくプティ・ヴォージラール街<sup>45)</sup>に面している...」ロベール・モレル氏なる人物が全体を43,000リーヴルで購入した。

現在の所有者の父親が、1858年にこの建物を買収したが、残念なるかな、数年前から荒廃してきた... 「栄光の過ぎ去るはかくも速し」 Sic transit gloria mundè...

## ルイ 14 世時代の古い邸宅

## 「パリ歴史散策」(9)

ジョルジュ・カン 著  
金 柿 宏 典 訳注

1) absinthe Pernod：ベルノは商標。アプサントは、にがよもぎ、アニス、茴香などをまぜて醸成したアルコール飲料。強い酒なので飲み過ぎるとアル中になり易かった。

2) Amer Picon：ピコンは食前酒アペリティフの俗語。

3) Armagnacs：現在の南フランスのジェル県一帯の旧名で、アルマニャック伯爵領だった。この地の銘産のブランデーの総称で、日本でいえば、さしずめ「灘の生一本」の類か。

4) モンバルナス大通り 25 番地のこの邸宅は、1712 年の建造で、建築主はマチュラン・シュアンスである。しかし、彼は翌 13 年に転売、それ以後はベチューヌ伯、コンディ親王、フィリップ・ヴァンドーム、シャルル・ド・ヴァンドームと所有者が代り、一時ラ・トゥール・ドーヴェルニュ家も所有していたが、1806 年に亡命貴族の財産として競売された。1910 年当時は版画家のレオポール・フラマンが住んでいた。美しい入口の柵から入ると、小さな中庭があり、右手にバルコニーとマスカロンの飾りのついた高い窓を持つ邸がある。正面玄関上に三角形の破風があり、庭に面しているが、23 番地からも見る事ができる。

5) rue de Vaugirard：第 5 区と第 6 区を通る。サン・ミッシェル大通りとフェーブル大通りを結ぶ長さ 4,360 米、幅 15 米から 22 米の通り。現在のパリで最長のこの通りはリュテシアとドルーを結ぶローマ時代の古道であった。1860 年までパリ城内にあったヴォージラル街と、入市税の徴税請負人の柵門の外にあった市外のヴォージラル村の大通りが、1868 年に合併して出来た。この道の先端の部分は、フィリップ・オーギュストとシャルル 5 世の城壁の外にあった外堀の道とヴォージラル柵門を結んでいた。この柵門は、現在のパストゥール大通りと出会った地点にあった。この通りに沿って多くの名所旧蹟がある。15 番地にはリュクサンブール宮があり、現在は上院がおかれてい

るが、大革命時代は牢獄として使用された。ジロンド派をはじめ 800 名以上が収容され、そのうちの 1/3 以上の者が断頭台で処刑された。70 番地にカルメル派の修道院とサン・ジョゼフ教会がある。この教会も大革命時代にやはり牢獄となり、アルル大司教やボーヴヤサントの司教たちの高位聖職者が監禁され、1792 年 9 月 2 日から 4 日にかけて、115 名の司祭らと共に虐殺された。183 番地は昔のヴォージラール村の大通りだったが、道幅は現在の半分くらいしかなかった。この辺り一帯はサン・ジェルマン・デ・プレ大修道院の所有地で、緑豊かで肥沃な谷間だった。1256 年、大修道院の司祭ジラル・ド・モレが、病氣療養中の修道士のために別荘を建設した。これにより小さな村落が発展したといわれる。この別荘を住民たちは Val Gérard と呼んだが、それがやがて Varlgerard、Vaugirard に転化した。

6) rue Cassette : 第 6 区にあり、レンヌ街とヴォージラール街を結ぶ、長さ 290 米、幅 7 米から 10 米の通り。1412 年にはカッセル小路 ruelle de Cassel と呼ばれていた。1523 年にはブリニー街道 Chemin de Pouligny, 1547 年にはカッセル通り rue de Cassel, 1561 年にはカッセル大通り, Grant-rue Cassel となり、これが転化し、カセット Cassette となった。1866 年のレンヌ街開通までは、ヴィュー・コロンビエ街からカセット街は始まっていた。この通りの 12 番地から 16 番地にかけて、ベネディクト派の広大な修道院があった。また 18 番地から 22 番地にカルメル派の修道院があり、大革命時代に国有財産として売却されてしまった (1791-95)。21 番地はイエズス会所有の邸があったが、こども 1763 年に彼らが追放された時に没収された。

7) rue de Bagneux : 1935 年までであったが、この年にジャン・フェランディ街と改名されてしまった。第 6 区にあり、シェルシュ・ミディ街とヴォージラール街を結ぶ長さ 165 米、幅 10 米の通り。1530 年頃、ピエール・バニョー所有の土地に開通したため、地主の名 Bagneult が Bagneux になった。しかし 1935 年にこの土地の市議員 Jean Ferlandi (1882-1935) の名をとって、新しくジャン・フェランディ街となった。2 番地から 6 番地にかけて、1747 年以降、サン・シュピス教区の五番目の墓地がつくられた。バニョー墓地 Cimetière de Bagneux である。縦横 75 米と 28 米で、土地が石だったので衛生的で、死体をそのまま墓穴に入れていた。その共同墓地は 5 米四方で、深さ 6 米、約 500 体を埋葬したという。1755 年 66 歳で歿したモンテスキューが此処に埋葬されたという。1784 年に閉鎖され、ヴォージラール街の新しい墓地に移転した。跡地は数年後に競売に付された。

8) rue du Cherche-Midi : 第 6 区と第 15 区にまたがる通りで、クロワ・ルージュ十字路とヴォージラル街を結ぶ、長さ 1,212 米、幅 13 米から 15 米の通り。この道はリュテシアとヴォージラルを結んでいたローマ時代の古道で、1832 年に現在の通りになった。この道路の開通のためヴォージラル街道、ヴィエイユ・テュイルリ街道、シェルシュ・ミディ街 rue de Cherche-Midi, シャッス・ミディ街 rue du Chasse-Midi などが吸収され消滅した。シェルシュ・ミディの名の起源は、ドラゴン街の南端にあり、パリ南部に向ふ出発点となった hôtel de la Chasse に因んで、「Chasse から南 Midi に向う路」rue qui va de la Chasse au Midi の省略形から Cherche-Midi になったという。この通りには多くの由緒ある豪邸があるが、特に注目されるのは 37 番地の邸宅である。この土地を購入したカルメル派修道会が二軒の豪邸を建築して貸し出した (1740)。その後、1756 年に借主となったのが、ルイ 14 世の子トゥールーズ伯爵の未亡人ソフィー・ド・ノワイユである。それ以後この館はトゥールーズ館 hôtel de Toulouse と呼ばれるようになる。大革命によりカルメル会が追放され、この邸宅は政府が所有者となって、それまで市役所にあった軍関係の部局をここに移転させた。その部局の書記官をしていたのがピエール・フーシェ (1772-1845) で、フーシェ一家も此処に移住する。彼の娘アデルがヴィクトール・ユゴの初恋の女性で、二人は結婚し (1822.10.12.), 新婚の二人は、1824 年 3 月までこのトゥールーズ館で暮したのである。

9) Thébaidé : テーベを首都としたエジプト南部地方の名称。ローマ皇帝デシウス (在位 249-251) の迫害を逃れ、多くのキリスト教徒がこの地の砂漠地帯に避難した。筆者は多分ラシーヌ作『テバイ物語』*La Thébaidé* (1664.6.20. 初演) などを想起したのであろう。テバイ王オイディプスの二人の息子ポリュネイケスとエテオクレスの王位をめぐる血みどろの争いや、妹アンティゴネの悲惨な末路など、オイディプスの悲劇が背景になった。

10) Anne Robert Jacques Turgot, baron de L'Aulne (1727-1781) : フランスの政治家、経済学者。父ミシェルはルイ 15 世時代のパリ市長だった。最初は聖職者になろうとして神学を専攻、ソルボンヌにラテン語の論文『人間精神の進歩について』という力作を提出した (1749) が、教会に入るのを断念、法学に転じ司法官を旨とした。1752 年にパリ高等法院顧問官、翌年に請願書調査官になった。この間に彼はパリの文学サロンの常連として、ヴォルテールや百科全書派と交際、百科全書にも協力し寄稿している。また宗教的狂信に対しても戦った。リモージュ知事となり (1761-64), フランスで最

も貧困なこの地方に数々の善政を施行し活性化させた。租税の改革，道路橋梁の建設など公共事業による産業振興，教育施設の改善，職業の自由選択制の確立，農業会の創設，聖職者たちの社会奉仕への参加などである。彼はまた『穀物取引きの自由について』 *lettres sur la liberté du commerce des grains* (1770) などの政治経済の著書で注目されるようになった。彼はケネー (1694-1774) の弟子と自称，重農主義者と目されたが，現在ではケネーとアダム・スミスの間中に位置すると評価されている。結論的にいえば，彼の経済計画は，国内外の商業の完全な自由化であった。

ルイ 16 世の即位後，宰相に返り咲いたモールバの推薦により，チュルゴは海軍秘書官 (1774.7.20)，ついで財務総監 (同 8.24.) に任命される。財政赤字解消のため，チュルゴは緊縮財政を唱え，税政の簡素化，穀物の自由取引き，特権的同業組合の廃止，国内関税の撤廃など，封建制の特権が商工業の発展を阻害している現状を打破し，自由主義経済による産業の発展，ひいては社会の繁栄を招来しようとした。しかしかかる改革に対し，国民の権利の保護者を任ずるパリ高等法院が真っ先に反対を表明した。また自分たちの特権を侵害される事を怖れた貴族階級が，王妃マリ・アントワネット，王弟アルトワ伯らを中心に結束，ルイ 16 世にチュルゴの解任を迫ったのである。弱気な国王は，王朝復活の原動力となり得た改革案を葬り，チュルゴを罷免する (1776.5.12.)。彼の諸政策は間もなく廃棄されてしまうが，彼の改革の理念は，その後多くの後継者により受け継がれていった。

11) vin clairet : 南フランスで栽培される白葡萄の品種から醸成した白ワイン。ボルドー地方のものは薄い色の赤ワインになる。

12) contredanse : イギリスの country dance が起源で，男女が向い合って踊るカドリル。17 世紀，18 世紀のフランスで流行した。

13) Jean Pierre Claris de Florian (1755-1794) : 南仏ガール県ル・ヴィガン郡の郡庁所在地ソーヴ市近郊のフロリアン城で生れた。富裕なブルジョワ階級の出身で，ヴォルテールの甥の子で，この文豪に愛され詩作に励んだといわれる。ルイ 14 世とモンテパン夫人の孫に当たるパンティエーヴル公に仕え，アネ城の宮廷で暮した。1788 年にアカデミー・フランセーズの会員に選出され，平穏な晩年を約束されたかにみえたが，大革命により境遇が激変，反革命分子と逮捕され，熱月 9 日の政変で，26 日後に釈放されたが，この間，心身共に衰弱し，釈放された 12 日後の 1794 年 9 月 13 日に歿した。享年 39 歳だった。彼は 18 世紀末から流行した感傷的抒情詩の第一人者で，優雅艶麗な調

べの作品は広く人口に膾炙し愛唱された。喜劇、騎士道小説、牧歌など多くの作品を残したが、代表作は『寓話』*Les Fables* (1792) である。

14) Marc-Antoine-Madelaine Désaugiers (1772-1827)：シャンソン作家，ヴォードヴィリスト。父マルク・アントワヌも有名な作曲家で，1774年にパリに定住したので，彼はパリ生れのパリ育ち，マザラン校に学んだが，有名な批評家ジョフロワ（1743-1814）が教師陣にいた。その後神学校に入ったがすぐ退学，大革命の過激化を恐れ，サン・ドミンゴ島の農場主の妻になっている姉を頼ったが，すぐに黒人奴隷の叛乱に会い，抵抗するも捕虜になり，命からがら脱走，海上で運良くアメリカに向うイギリス船に救助されたが，戦闘の疲労からか高熱を発し，伝染病かと恐れた船員たちに，着のみ着たままの姿で，ニュー・ヨーク港につくなり下船させられた。しかしここでも親切な老婦人に拾われ，看病を受けて全快する。青春の若さと天性の陽気さで，クラヴサンの教師の口を紹介され，上流社会の人たちの好遇を得た。帰国の旅費を稼ぎ，やっと彼はパリに帰った（1797）。帰国するや，幼時から好きだったシャンソンと当時流行のヴォードヴィルの創作に熱中し，忽ち有名作家になった。彼は自ら作詩作曲した自作を友人たちの食卓で歌い，大いに座を賑わした。1803年には再興されたガヴォー協会の会長に就任，新人会員のベランジェを激励し，この才能ある青年を援助した。彼は王党派だったが狂信的ではなかったので，ベランジェとの共作を厭うことはなかった。代表作は『ドニ夫妻』*Monsieur et Madame Denis*，『午前5時のパリ情景』*Tableau de Paris à cinq heures du matin* など。

15) Charles Paul de Kock (1794-1871)：父は大革命の間に処刑されたオランダ人の銀行家である。銀行員として勤務中に発表した小説『わが妻の子』*L'Enfant de ma femme* がヴォードヴィルとなって上演されると，銀行員として好しくないとの理由で解雇されてしまい（1835），それ以後文筆生活に入り，1840年から71年にかけて，小説83篇，戯曲72篇を創作，人気作家となった。店員や職人，お針子や下町娘など，パリの小市民の生態をユーモアと人情に包んで表現した通俗小説は，その読み易い平易な文体によりパリの庶民やスペインやイタリアでも大いに愛読された。代表作は『ジョルジェット』*Georgette* (1820)，『デュボン氏』*Monsieur Dupont* (1824)，戯曲では『カトリーヌ・ド・クールランド』*Catherine de Courlande* (1814) など。

16) Ménilmontant：パリ東北部の地域で，第20区に入る。ベルヴィル村の一村落で，1860年にパリ市に合併された丘陵地帯で，パリ市の眺望は非常に良い。労働者や

職人達の住宅地で、ビュット・ショーモン公園やペール・ラシェーズ墓地の緑地帯を除くと、やはり場末という印象である。

17) La Grande Chaumière：第5区から第6区を経て第15区に至るモンパルナス大通りの112番地から136番にあった一般庶民のためのダンス場で、1778年から1853年頃まで隆盛をきわめ、ティヴォリ、マビユー、イタリヤなどのダンス場のライヴァルだった。初期は藁屋根の小さな東屋が幾棟か散在し、そこで飲んだりダンスをしたりした。1783年にイギリス人のティクソンなる人物が、何人かの共同経営者の協力で、3階建の建物を新築、周囲の広い庭園に、立木、花壇、洞窟、ブランコなどをつくり、1814年には射撃場も造成した。ティヴォリやボージョンより小規模だったが、すぐさまパリの新名所になった。やがてジェット・コースターも設置され、1837年には新経営者で擲弾兵上りのライール「親翁」が警察と交渉し警官の巡察を中止させる事に成功、このため常に起こっていた警官と学生仲間との喧嘩口論が無くなった。1845年にはじめてボルカが紹介され、ついでより大胆な「カンカン」が出現したのも、このダンス場である。当時の有名な舞姫ローラ・モンテスも踊りに来ている。またジュール・ファーヴル、オーラス・ヴェルネ、ポール・ド・コック、エミール・ド・ジラルダン、サン・シモン、ティエールら、やがて政界、新聞界、文壇、画壇で活躍する人達も、学生時代さかんにここに通ったのである。入場料は木曜日が2フラン、土・日曜が1フラン、他の日は50サンチームだった。しかしクロズリ・デ・リラに取って代られ、1855年に閉場した。

18) 7月革命をさす。1830年7月27, 28, 29日、いわゆる栄光の三日間と呼ばれるパリ市民の武装蜂起により、ブルボン王朝が崩壊、オルレアン公ルイ・フィリップが即位し、7月王政が成立した(7.31.)。決起した叛乱分子の中に学生たちも多く含まれていた。

19) échaudé：小麦粉の生地を茹で、オープンで軽く焼いた菓子で胃腸の弱い人などに与えた。

20) Polymnie, ギリシャ語で Polumnia：芸術の女神一人。作者によって彼女の司るものが相異しているが、主として頌歌、パントマイム、抒情詩の女神とされている。しかしハーモニー、交響曲の創始者とも、幾何学の女神ともされている事がある。

21) Françoise d'Aubigné, marquise de Maintenon (1635-1719)：父コンスタン・ドーヴィニエは有名なプロテスタントの詩人アグリッパ・ドーヴィニエ(1552-1630)の息子だが、悪党で、フランソワーズが生れた時(11.27.)、イギリス人との内通の罪で、フ

ランス中西部ドワー・セーヴル県の県都ニオールニオールの城に、妻ジャンヌ・ド・カルディヤックと共に監禁されていた。ジャンヌがこの城内の牢獄で出産した娘が、後に国王ルイ 14 世の妻になろうとは夢にも思っていなかっただろう。1639 年に釈放され、一家はマルチニック島に移住するが、父が死んだため、ジャンヌはフランソワーズと息子を連れて帰国する。この息子も父そっくりの悪党として一生を終ったらしい。頼るべき親族がカトリックだったので、彼女もカトリックに改宗、ウルスラ修道院で教育を受け、15, 6 歳の頃に実家に戻ったらしい。貧しかったが、かの大詩人の孫という栄光の血を受け、教養もあった美少女は、偶然、隣家に住んでいた『滑稽物語』*Le Roman Comique* (1651-57) の作家ポール・スカロン (1610-1660) に見染められ、自分の死後は生活できる位の財産は遺贈するという約束で、結婚したのである (1652.6.)。夫は妻より 25 歳も年上で、病気のため半身不随だったので、妻という名の介護師をもらったといってよい。やがて夫が死去 (1660.10.7.)、母も死亡していたので、天涯孤独となった彼女は、友人だったモンテスパン夫人から、彼女とルイ 14 世の間にできた子供たちの家庭教師を依頼されたのである。彼女の献身的養育により、ルイ 14 世の王子たちは立派に成長した。ルイ 14 世は長男のルイ・オーギュスト・ド・ブルボン、後のメヌ公爵 (1670-1736) を正式に自分の子であると認知した 1673 年 12 月、これまでのフランソワーズの献身に感謝し、ヴェルサイユ宮内に居住を許可し、更にマントノンマントノンの土地を彼女に寄贈し、侯爵領として、これ以後、マントノン侯夫人と称する事を許可したのである。マントノン侯夫人となった彼女はやがてモンテスパン夫人に代ってルイ 14 世の愛情を獲得、モンテスパン夫人をヴェルサイユから退去させ、王妃マリ・テレーズの死 (1683.7.30.) の後、彼女は秘密結婚により、ルイ 14 世の第二の王妃になった (1684.6.?)。その後、彼女は国政に介入していく。

22) Françoise Athénaïs de Rochechouart de Mortemart, marquise de Montespan (1641-1707) : 父モルトマル公爵ガブリエル (1600-1675) はルイ 13 世に仕え、パリ総督に任命された (1669)。彼女はモンテスパン侯爵と結婚 (1663)、王妃マリ・テレーズの侍女として宮廷に出仕、美貌と軽妙な話術で王妃の御気に入りとなった。こうしてルイ 14 世ともしばしば会うようになった彼女は、やがてルイ 14 世の愛人になる。豊かな金髪、魅惑的な青い瞳、眩しいほどの白い肌をもった彼女は、宮廷第一の美女として国王の愛情を独占、ルイ 14 世の前の愛人だったラ・ヴァリエール夫人 (1644-1710) を宮廷から追放し修道院に引退させた。また弟のヴィヴォンス公 (1630-1688)

をフランス元帥に昇進させるなど、専横の振舞いが多かった。やがてルイ 14 世は情熱的な美貌と才能溢れる話術で自分を魅了したこの女性とその反面、高慢で毒舌家で野心家でもあるのに気づくのである。マントノン夫人と対照的なスカロン未亡人の物静かで堅固な信仰心を持ち、理性と教養ある人柄に、ルイ 14 世はひかれていく。家庭的で平和な雰囲気を経王はスカロン未亡人と楽しむようになる。この事がやがてモンテスパン夫人の失寵の原因となる。死の床で王妃がマントノン夫人に指環をはずして与えたという事は、自分の死後は自分に代って国王に仕えて欲しいという遺言に他ならなかった。彼女は自分の敗北を悟り、王妃マリ・テレーズの死の翌年の 1684 年、モンテスパン夫人はヴェルサイユを退出する。パリのサン・ジョゼフ修道院に入り、慈善事業に携わったが、健康を害し、中部フランスのアリエ県の温泉地ブルボン・ラルシャンボーで治療中に歿した (1707.5.27.)。66 歳だった。

23) ルイ 14 世の 3 人の子供たち：モンテスパン夫人とルイ 14 世の間には 7 人の子ができたが、第一子は夭折、男子 3 人、女子 3 人が成長した。文中の 3 人とは、1673 年 12 月に国王によって認知された子供たちである。長男ルイ・オーギュスト・ド・ブルボン、メヌ公爵、後にドマール公爵 (1670-1736)。次男のルイ・セザール・ド・ブルボン、ヴェクサン伯爵 (1672-1683)。長女ルイズ・フランソワーズ・ド・ブルボン、通称ナント嬢 (1673-1743) である。この後に 1676 年に認知されたルイズ・マリ・ド・ブルボン、通称トゥール嬢 (1676-1681)、1681 年に認知されたフランソワーズ・マリ・ド・ブルボン、通称プロワ嬢 (1677-1749)、1681 年に認知されたルイ・アレクサンドル・ド・ブルボン、トゥールーズ伯爵 (1678-1737) がいる。

24) Paul Scarron (1610-1660)：フランスの小説家、詩人、劇作家。パリに生れる。幼少の時に母を失い、継母に苛められる。19 歳の時聖職者となり、ル・マン司教に仕えてこの地に住む。司教の供としてイタリアに赴く (1835)。ローマ滞在中に詩人メナール、画家のブッサンを知る。帰国後はやはり司教の供として町の名家や城館を訪問、この間の見聞が将来の創作に役立った。1638 年の謝肉祭の時の悪戯が原因といわれる結核性リューマチにかかり、1640 年に 8 年間住んだル・マンを去りパリに帰った。ルイ 13 世の寵姫オートフォール嬢の援助で、1643 年に 500 エキュの年金と「王妃の病人」*Malade de la reine* の称号を得た。同年出版した第一詩集『ビュルレスク詩集』*Recueil de quelques vers burlesques* の好評に勇気づけられ、『台風』*Le Typhon* (1644)、喜劇『ジョドレ』*Jodolet ou le maître valet* (1643) などを発表、1648 年に『戯作ヴェルギリ

ウス』 *Le Virgile travesti* を公刊し、滑稽化ビュルレスク（バーレスク）詩風を確立、写実小説『滑稽物語』 *Le Roman Comique*（1651-57）で文壇に不動の位置を築いた。しかしこの間にも病気は進行、首も手も足もしびれて半身不随の状態になった。こんな時に隣家の気立ても優しい美少女のフランソワーズ・ドーヴィニエを見染めた。彼は彼女の貧しい境遇に同情、忠実な看護師としても有用な彼女を妻に迎えた。彼の文名と機智、美人の妻のもてなしにひかれ、彼のサロンは多くの貴族、貴婦人、文学者で賑わったが、この経費の捻出のため、彼は病軀をおして執筆活動を続けねばならなかった。彼が創作の苦役から解放されたのは、1660年10月の死によってである。

25) rue Saint-Jacques：第5区にあり、ガランド街とポール・ロワイヤル大通りを結ぶ、長さ1,550米、幅7米から20米の通り。ローマ人によりユテシアが占領される以前からあった古道で、ガリヤを北から南へ行く旅人は、シテ島を中継点としてセヌ川を小舟で渡った。ローマ人の占領後は、大橋、小橋という2つの橋が建造された。やがてオルレアン街道となり、ローマ人により幅9米の堅固な舗装道路に改造される。時代と共にさまざまな呼び名がつけられたが、1806年、ドミニコ派の修道院付属のサン・ジャック礼拝堂に因んで、現在の道の名になった。この通りの開通のため、幾つかの通りが吸収され消滅した。

26) Les Ursulines：聖女ウルスラを奉戴する修道会。21の修道会があるが、主要なものは聖女アンジェル・メリシによって、1535年北イタリアのプレスシアに創設された「聖ウルスラ修道会」 *ordre de Sainte-Ursule* である。1620年には修道者が門外に出ることを許さない *couvent cloitré* になった。この派の修道女は厳粛な誓願をたてた隠修修道女で、もっぱら教育に携わった。

聖女ウルスラは、伝説的な存在で、イギリスの王女だった。改宗した婚約者と1万1千の処女の侍女を従え、ローマに巡礼、帰途、ケルン近くでフン族に皆殺しに会ったが、忽ち天使たちが出現し、フン族を追い払ったという。9世紀頃に生れたこの伝説は、ウルスラの墓石なるものが発見された12世紀に改変されたらしい。1万1千の処女も、最初は11人の女性の殉教者が源になっている。彼女はケルン市の守護聖女で、現在も崇拜されている。

27) Maison d'Albret：11世紀に遡る南仏の名家で、結婚によりペリゴールとカストルの伯爵領、リモージュ子爵領（1470）、ナヴァール王領、ベアルンとフォワの伯爵領を取得（1484）、大領主となった。最も有名な人物は、ドルー伯シャルル・ダルベール、

フランス元帥で、アザンクールの戦いでイギリス軍に大敗して戦死した(1415.10.25.)。アンリ2世がアントワヌ・ド・ブルボンのため、1558年にアルブレ公爵家を創設してやるが、この子孫のジャンヌ・ダルブレがアンリ4世の母で、彼はアルブレ公領を王領に編入する。しかしルイ14世は(1651)、スタンと交換してこの旧公領をブイヨン公フレデリック・モーリス・ド・ラ・トゥール・ドーヴェルニュに与えたので、フレデリックはアルブレ公爵となった。1654年にフランス元帥となったセザール・フェビュス・ダルブレに男子の相続人がいなかったため、アルブレ公家は断絶する。文中の元帥夫人は彼の妻ではなかろうか。アルブレは昔のガスコーニュ地方の一部で、ほぼ現在のランド県にあたる。

28) Marie de Médicis (1573-1642) : イタリア語では Maria de' Medici。父はトスカナ大公フランチェスコ1世、母はオーストリー大公妃ジャンヌで、1573年4月26日、フィレンツェで生れた。フランス国王アンリ4世の再婚相手となり、1600年12月17日リヨンで挙式、1610年5月13日、サン・ドニで聖別された。結婚の翌年の1601年9月27日木曜日、彼女はフォンテーヌブロー宮で後にルイ13世となる皇太子を出産、王妃としての責務を果たした。美人だったが高慢頑固かつ執念深い性格が災いして、アンリ4世ははやばやとこの妻から逃げ出したので、彼女の結婚生活は不幸だった。しかしイタリア女性らしく多産で、皇太子の他にも女3人、男2人を出産している。国王の暗殺犯ラヴァイヤックの黒幕の一人と疑われて非難されたが、夫王の死後の1610年5月15日、幼王ルイ13世の攝政として政権を握り、シュリを筆頭とする夫王の忠臣たちを遠ざけ、フィレンツェから従って来た腹心の女官レオノーラ・ガリガイとその夫アンクル元帥ことコンチーニに政治の実権を委ねたのである。しかしながら大貴族たちの不満を抑えられず、リシュリユを登用して難局の打開を企図した。コンチーニの密偵政治への不満を背景に、ルイ13世は政治の実権を奪取しようとして、親衛隊士官に命じ、コンチーニを暗殺させて(1617.4.25.)、母后にかわり親政に乗り出した。ルイ13世によりプロワに追放されたマリ皇太后は何度も政権奪回の戦いを挑むが、リシュリユ枢機卿によりその都度阻止され、特にルイ13世とリシュリユの離反を策した「欺かれた者たちの日」la journée des Dupesと呼ばれる1630年11月11日の陰謀に失敗してから、彼女は決定的に宮廷から追放された。ブリュッセル、ロンドンなど各地を転々としながら、リシュリユ打倒の陰謀を諦めなかったが、最後はドイツのケルンで窮乏のうちに歿した。1642年7月3日の事である。

29) Marguerite de Villette, marquise de Caylus (1673-1729) : 彼女はアルテミーズ・ドービニエの孫で、マントノン夫人の従妹にあたる。ルイ 14 世の宮廷で成長した彼女は、13 歳でケリュス侯爵と結婚した。才女だった彼女は当時の出来事について興味ある回想録を残したが、これは 1770 年にヴォルテールにより出版された。特にルイ 14 世の宮廷とサン・シール家に関しての記録は面白い。本文中では *Mémoires* となっているが、辞書では *Souvenirs de Mme de Caylus* となっている。

30) rue des Tournelles : 第 3 区と第 4 区にまたがり、サン・タントワヌ街とボーマルシェ大通りを結ぶ、長さ 580 米、幅 10 米から 15.5 米の通り。1839 年までに何回かの延長工事後に現在の姿になったが、そのため多くの小路や街が吸収されて消滅した。この通りの一部は 1400 年頃には既に存在していて、昔あったトゥールネル宮の東側に沿って延びていたために、この名がある。1559 年 6 月 30 日、アンリ 2 世が騎馬試合で不慮の事故にあい、死亡したのもこの宮殿である。豪華を誇ったこの宮殿は、夫を奪ったいまわしい不吉の場所として、王妃カトリーヌ・ド・メディシスの命令により取り壊されてしまい、その名はこの通りに残るのみである。

31) Antoine Nompar de Caumont, comte puis duc de Lauzan (1633-1723) : 南仏ロット・エ・ガロンヌ県ローザンヌ城に生れた。傲慢で野心的な宮廷人で、最初はルイ 14 世のお気に入りだった。しかし国王が自分に与えると約束した要職を他人に与えてた事を怒り、国王の面前で剣を折って、こんな君主には仕えられないと叫んだ。実は彼が国王の命令をきかず、発令前に要職に就く事を吹聴していたのを知って、国王が不快に思ったからである。この不礼のためローザンはバスチーユに投獄されるが、ルイ 14 世は数日後に釈放してやっている。軍籍に復帰した彼は、アンリ 4 世の孫モンパンシエ嬢に恋して結婚しようとしたが、彼に反感を持つ宮廷人の陰謀でこの結婚は成立しなかった。ルイ 14 世は彼を慰めるため、フランドル遠征軍司令官に任ずるが、彼はモンテスパン夫人の不興を買い、司令官を罷免され、逮捕されピニョル牢に投獄されてしまった (1671-80)。モンパンシエ嬢の熱心な懇願により、やっと釈放された彼は彼女と秘密結婚をした (1681)。彼は監禁の憂さをはらすかのように賭博に耽り、彼女の莫大な持参金を蕩尽してしまう。転機を求めてイギリスに渡った彼は名誉革命 (1680) に遭遇、王位を追われたジェームズ 2 世の王妃と王子をフランスに安着させた。さらに彼はジェームズ 2 世の復位を実現しようとして彼と共にアイルランドに渡り挙兵するが、ポイン川の戦いでウィリアム 3 世軍に完敗 (1690.7.11)、スチュアート王家再興の夢は断たれた。

このようなローザンの働きに対し、ルイ 14 世は宮廷への出仕を許し、彼に公爵位を授与したのである (1692)。妻のモンパンシエ嬢の死 (1694) の後、彼はサン・シモンの義妹デュルフォール嬢と再婚するが、サン・シモンはローザンの肖像を辛辣かつ適確に描いている。「薄い金髪の小柄な男だが、均斉のとれた体格で、機智に溢れた高慢な顔付きをしている。野心満々の浮気男で、何事にも満足せず、学もない... どんな身振りでも極めて高貴で、勇敢無比、危険なまでに豪胆で... 宮廷のあらゆる人々は彼を恐れている。その毒舌は何人も容赦しない」と。

32) 正確には Saint-Cyre-L'Ecole : ヴェルサイユの西にある町で、現在の人口は約 17,000 名。1686 年、マントノン夫人が「サン・ルイ学院」Institut de Saint-Louis の名で、財産のない貴族の子女 250 名のための無料教育施設を創立した。最初、教育は上流夫人の団体に委任されていたが、1692 年からアウグスチノ会の修道女たちが先生になった。マントノン夫人が生徒の情操教育のための劇作をラシーヌに依頼し、彼の最後の作品となった悲劇『エステル』*Esther* (1689.1.26.) と『アタリー』*Athalie* (1691.1.?) が、この学院の女生徒たちによって、ルイ 14 世をはじめ宮廷人の前で初演されたのも、このサン・シール校であった。国王の死後、マントノン夫人はこの学院に隠退し、ここで歿している (1719.4.15)。大革命時代、この校舎は兵営ついで軍病院に転用された。1806 年、ナポレオンは 1802 年にフォンテーヌブローに創立した士官学校を此処に移転させた。以来、この士官学校は、歩兵、騎兵、後に戦車隊の士官を養成した。校舎は第 2 次大戦中の 1940 年から 44 年にかけて爆撃により破壊された。1946 年、陸海空特別士官学校として、モルビアン県コエトキダンに移転した。跡地には、陸軍幼年学校と高等中学が建設された。

33) Jean Baptiste Colbert (1619-1683) : ランスのラシャ商の家に生れ、初めリヨンの商店に勤務していたが、枢機脚マザランに認められ、彼の個人財産の管理をまかされた (1651)。ルイ 14 世に推挙され、時の財務総監で権勢並ぶ者がいなかったフーケ (1615-1680?) の公金横領を摘発し、彼を失脚させた。その功によりフーケの後任として財務総監に就任 (1661)、次に首相、海相を兼務 (1669)、事実上の首相としてフランスの国力の充実に努力した。イギリス、オランダ両国に追いつくため、海外貿易と植民地経営の振興を推進しようとして、東インド会社を設立した。商船団の安全な活動を確保する目的で、海軍力の増強を計画、兵学校、造船所などの諸施設を建設した。国内産業を保護振興するため、その生産、品質、販売までも監督し、他方、国外からの輸入品には

重税を課す重商主義的政策を実行した。彼は農民の負担を軽減するため、人頭税の減税を実施、土木事業を起して国土整理を計った。また科学や芸術の振興にも留意し、アカデミー・フランセーズを援助、多くの作家や芸術家に年金などを授与して、創作活動を奨励した。彼はルイ 14 世の好戦的性格による多大な軍事費の支出が、国家財政を破滅させるのではないかと憂いつつ歿した（1683.7.6.）。ルイ 14 世の国王としての成功は、コルベールの献身的な努力による財力にその大半は負っていた、といつてよい。

34) Laurent Angliviel de La Beaumelle (1727-1773) : 南仏ガール県ヴァルローグ生れの作家。教育はカトリックの学校で受けたが、家代々新教徒だった。ジュネーヴ、デンマーク滞在後に帰国、教師になったがやがて辞任、ベルリン滞在中にヴォルテールと知り合う。しかしこの哲学者は近著の『パンセ』*Mes pensées*（ベルリンで出版）の中で、ラ・ボームルをあからさまに批判した。このためヴォルテールは一生を通じての宿敵となる。帰国した彼は『ルイ 14 世の世紀についての覚書』*Notes sur le Siècle de Louis XIV*（1752 年、3 巻）の中で、このヴォルテールの代表作を徹底的に批評し攻撃した。しかも彼はヴォルテール攻撃のみならず、オルレアン公爵を論難する過激さで、これが筆禍となり、バスチーユに 1 年間投獄され、釈放後はパリから 50 リュー（1 リューは約 4 軒）の所払いになった。本文に引用されている『回想録』はアムステルダムで出版されたが（1755-56）、この著作の中でも、彼は前回の筆禍事件を忘れたのか、ルイ 14 世自身の人柄とその取り巻きの性悪な顧問官たちを君側の奸として批判している。このため再びバスチーユに投獄された。1 年後に釈放、パリ所払いとなり、トゥールーズに去っている。しかしこの都市で起った貿易商ジャン・カラ（1698-1762）に対する裁判、息子が新教からカトリックに改宗するのを妨害するため殺害した、という殺人罪で父ジャンが起訴されたカラ事件では、ヴォルテールと同じく、ラ・ボームルもカラの無罪獲得のために戦ったが、二人が和解する事はなかった。1770 年に許されてパリに帰った彼は、国王司書に任ぜられ、年金を支給されたが、その数か月後に友人のラ・コンダミーヌの家で歿した。

35) hôtel d'Albret : 第 3 区と第 4 区にまたがるフラン・ブルジョワ街（長さ 705 米、幅 8 米から 13 米）の 31 番地にある。この邸はフランス軍総司官だった偉大なる将軍アンヌ・ド・モンモランシーが定礎式を行った。その後、相続や転売により所有者は変り、1648 年、セザール・フェビュス・ダルブレが義兄アンリ・ド・ゲネゴーから贈与され、持主になっていた。彼は豪華な生活を好み、家族の他に親族や友人たちを自分の

周囲に集めていたがその中に従兄のモンテスパン侯やスカロン未亡人がいたのである。彼女は人柄の良さを見込まれ、モンテスパン夫人とルイ 14 世の間に出来た子供たちの養育のため、この家に住み込むことになる。

36) hôtel de Richelieu : この名のついている邸は第 4 区ベチューム河岸 18 番地のもの。これは相続によってリシュリユー枢機卿の甥の子フロンサック公リシュリユー元帥 (1696-1788) が、1729 年に持主になった。次は第 2 区のルイ・ル・グラン街 34 番地のハノーヴァー館 pavillon de Hanovre で、リシュリユー元帥が前の所有者アンタン公から買取り、巨費をかけて改造した邸で (1760 年完成)、彼がハノーヴァーを占領した時に手にした掠奪品の財宝が建築費になったからといわれる。3 番目は第 3 区と第 4 区にまたがるヴォージュ広場 21 番地の建物だが、リシュリユー枢機卿自身は住まず、召使たちが住んでいたのではないかと いわれる (1622-25)。この邸は一度他人の手に渡るが枢機卿の甥の子アルマン・ジャン・デュ・プレシ・ド・リシュリユー公爵が、1659 年に 167,000 リーヴルで買収、やがて自分の息子、未来のリシュリユー元帥となるフロンサック公 (1696-1788) に遺贈している。従ってルイ 14 世とモンテスパン夫人との間に出来た最初の 3 人の子供たちは、年代的にみても、またスカロン未亡人の住んだフラン・ブルジョワ街のアルブレ邸からの距離から考えても、本文中のリシュリユー邸はこのヴォージュ広場の邸ではなかろうか。

37) François Michel Le Tellier, marquis de Louvois (1641-1691) : 父ミシェル (1603-1685) も有能な政治家、外交官で、陸相の時、フランス軍制を改革し、後事をルーヴォワに托した。父の遺志を継いで彼も陸相となり、ルイ 14 世の軍事的栄光を求める野心を煽り、名将テュレンヌの戦死 (1675.6.27) 以後は、フランス軍の総帥となり、軍備の充実に努力した。指揮命令系統を確立、地方軍を整備し兵員を増強、常備軍を 30 万に拡大し、また優秀な士官養成のための兵学校を創立した。常に増大する軍費、戦費を抑制しようとする財務総監のコルベールとは烈しく対立した。しかし彼の死後、ルーヴォワはルイ 14 世の最も信頼を寄せる寵臣となったが、国王とマントノン夫人との秘密結婚に反対したため失寵し、不遇のうちに歿した (1691.7.16.)。彼は絶えず国王を戦争に駆り立て、軍事的栄光を追い求めさせた。剛直で独裁的で野蛮な性格のルーヴォワはフランス軍兵士に対し、占領地の住民を屈従させるため恐怖をばらまく弾圧政策を実行するように指示した。その結果、パラチナ地方の掠奪 (1679)、ジェノヴァ砲撃 (1684)、龍騎兵による暴行などは、彼の責任とされている。

38) マントノン夫人のルーヴォワに対する嫌悪感は、彼が自分とルイ 14 世との秘密結婚に反対し、国王にこの結婚を断念するように忠告した事により頂点に達した。彼女は夫になったルイ 14 世にルーヴォワへの不信と憎悪を吹きこんだ。このような愚かな結婚は、ルイ 14 世をヨーロッパ中の嘲笑的になる、とルーヴォワは公言している、という具合に、彼女は国王に嘯いたらしい。ともかく側近中の側近だった彼が突然宮廷から退出させられ、しかもその直後に急死した事が、暫くの間、マントノン夫人の策略があったのではないかと噂された。

39) Françoise Marguerite de Sévigné, comtesse de Grignan (1646–1705) 女流作家セヴィニエ夫人の愛娘で、彼女がグリニャン侯爵 (1629–1714) と結婚し (1669)、同年、夫がプロヴァンス副総督として赴任するのに同行、夫の退官後は、夫の故郷の南仏ドローーム県グリヤンに住んだ。娘と別れたセヴィニエ夫人がパリやヴェルサイユなどの近況を彼女に書き送った『手紙』*Les Lettres* が、書簡文学の傑作になった事は周知の事実である。グリニャン夫人は大変な美人だったが道徳心堅固な立派な貴婦人だったそうで、彼女も母譲りの文筆の才があった。

40) Marie-Angélique du Gué de Bagnole, marquise de Coulanges (1641–1723) : 夫のクーランジュ侯フィリップ・エマニュエル (1633–1716) はセヴィニエ夫人の従弟で、パリ高等法院顧問官だったが、趣味の人生を送るため、顧問官の職を買却、シャンソンの作詞などを楽しんだ粹人で、『回想録』*Mémoires* を残しているが、セヴィニエ夫人からの手紙もつけ加えられている。妻のマリ・アンジェリックは、ルイ 14 世の宮廷を彩る美女の一人で、彼女もセヴィニエ夫人からの手紙を加えた書簡集をだしている。

41) rue Férou : 第 6 区にあり、カニヴェ街とヴォージラル街を結ぶ、長さ 120 米、幅 12 米の通り。この通りは 1517 年の少し前に開通したが、以前はフェルー袋小路といったのは、この土地が、パリ高等法院の代訴人エティエンヌ・フェルーの所有だったからである。この通りがサン・シルピス小路とも呼ばれたのは、この小路がサン・シルピス街に通じていたからである。1936 年に通りの一部が分離され、そこがアンリ・ド・ジュヴネル通りとなり、現在のフェルー街が出来上った。

42) Marie-Madelaine Pioche de la Vergne, marquise de Le Fayette (1634–1693) : 軍人だった父は文学好きで、母は社交好きだったので、小貴族の家庭ながら、ささやかなサロンを開き、彼女も幼い時から文学的雰囲気の中で成長した。セヴィニエ夫人と親交があり、文人的な神父メナージュ (1613–1692) から文章作法の手ほどきを受けた。

ランブイエ侯夫人のサロンにも通い、当時の一流の文人や貴夫人とも交流をもった。1665年にラ・ファイエット伯爵フランソワ・モティエ（1683年死去）と結婚、領地のオーヴェルニュに住んだが、領地の相続などの複雑な交渉が生じ、彼女はパリに出て宮廷の有力者によりパリ高等法院に解決のため運動する事となり、夫と別居する事になった。しかし夫婦仲がこれで悪くなる事はなかった。彼女は17、8歳の頃、王妃アンヌ・ドートリッシュの侍女として宮廷に出仕していた事があり、この縁で、この頃から親交のあったアンリエット・ダングルテールがルイ14世の弟フィリップ・ドルレアン妃になったのを機会に、彼女に仕える事となる。この約10年間の宮廷生活で見聞き体験した事柄が、フランス心理小説の傑作といわれる『クレヴの奥方』*La Princesse de Clève*を生んだ。彼女のサロンには当時の一流文化人が囂集し、ヴォージラルの館は一時フランス文化の中心の観があった。なかでも『格言集』*Réflexions ou sentences et maximes morales*（1665）の著者ラ・ロシュフーコー（1613-1680）との交際は有名である。

43) La Tour d'Auvergne：13世紀まで遡るフランスの名家で、居城のラ・トゥールまたはラ・トゥール・ド・ヴェルニュ城は、中部フランスのピュイ・ド・ドーム県の南部にある県の第二の都市イソワール市西方50軒にある。この家からはテュレンヌ子爵家（1490）、ブイヨン公爵家（1594）、アルブレ公爵家（1651）の3つの家系が生れている。

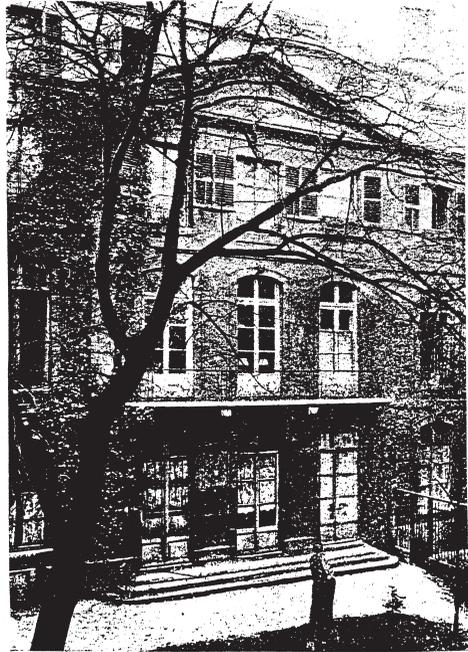
44) île de Jersey：フランスの沿岸から20軒ほどの所にあるアングロ・ノルマン諸島の最大の島で、イギリスの最南端にあたる。面積116km<sup>2</sup>、人口63,300人。野菜、花、牧畜などが主産業で、観光地でもある。亡命したヴィクトール・ユゴーが、1852年から53年まで滞在した。水平線上にフランス本土が見えるので、退役したフォランヴィルも故国を偲ぶ好適地として選んだのだろう。

45) rue du Petit-Vaugirard：1832年にシェルシュ・ミディ街が、ヴォージラル街とクロワ・ルージュ十字路を結んで開通した時に吸収され、現在は無い。15世紀初頭にはヴォージラル街道とも呼ばれていた。



DANS LE JARDIN.  
Richard et Bourdon, phot.

(図版 A) 庭内



(図版 B) 庭に面した正面



*Vue du Boulevard prise du Carrefour de Faugivard.*

(図版 C) ヴォージラールの辻からみた大通り



LA STATUE DE POLYMNIE.  
Richard et Bourdon, phot.

(図版 D) 歌の女神の像



FRANÇOISE D'AUBIGNÉ, MARQUISE DE MAINTENON.

(図版 E) マントノン夫人



(図版 F) モンテスパン夫人

## （追 記）

- (1) 本稿は、Georges Cain 著 *Le long des Rues* (Flammarion 社, 1912 年刊) から、訳者の興味をそそった章を訳したものである。原題の意味は、「通りに沿って」、であるが、パリの歴史に言及している箇所が多いので、「パリ歴史散策」と意識してみた。テキストをよりよく鑑賞する一助として、人名、地名などの解説として、訳注を補足してある。お役に立てば幸甚である。
- (2) 翻訳にあたり、主として利用させていただいた文献のみ記し、謝意を表したい。
- イ) 「十九世紀ラルース大辞典」
  - ロ) 「岩波西洋人名辞典」
  - ハ) 「世界美術辞典」(新潮社, 昭和 60 年刊)
  - ニ) 「フランス文学辞典」(白水社, 1974 年刊)
  - ホ) 北島広敏著「パリの橋」(グラフ社, 昭和 59 年刊)
  - ヘ) J-P.Clébert : *Les Hautes lieux de la littérature française*, (Bordas 社, 1992 年刊)
  - ト) J.Hillariet : *Connaissance de vieux Paris*. (Princesse 社, 1954 年刊)
  - チ) J.Hillariet : *Dictionnaire historique des rues de Paris* (Minuit 社, 1985 年刊, 2 巻)
  - リ) Félix et Louis Lagare : *Dictionnaire administratif et historique des rues et monuments de Paris* (Maisonneuve et Larose 社, 1994 年新刊)
  - ス) 村松嘉津著「巴里文学散歩」(白水社, 1958 年刊, 2 巻)
  - ル) 宇田英男著「誰がパリをつくったか」(朝日新聞社, 1994 年刊)
  - オ) ミシュラン社編「パリ」(実業之日本社, 1991 年刊)
  - ワ) 河盛好蔵著「パリ物語」(角川書店, 昭和 34 年刊)
  - カ) 新倉俊一他共著「事典・現代のフランス」(大修館書店, 1977 年刊)
- (3) 前号 (8) に校正ミスがありました。下線の如く訂正して下さい。
- p. 1. 最下段                    肩に
  - p. 3. 下から 3 行目        グランジュ
  - p. 17. 下から 7 行目       悲惨な